

名古屋市古沢町遺跡出土の土偶

和田 英雄
(日本考古学協会)

この土偶は、昭和44年12月、名古屋市中区古沢町で、名古屋市民ホール建設工事中に発見された縄文時代晩期から歴史時代にいたる複合遺跡を発掘中に、国学の士、今井正道氏により表面採集されたものである。この遺跡の発掘調査の報告は、すでに『古沢町遺跡発掘調査報告書』として、縄文時代編および弥生時代編が名古屋市教育委員会より発刊されているが、しかしながら、この土偶の存在については、未だ遍く先学諸氏の周知を見ぬようであり、本欄でその概観を述べて資料紹介としたい。

資料は頭部の破片のみで、軀幹部の形態は不明であるが、現存部の高さは10.3cmで、頸部は中空となり、なお下方に続く折損状態である。いま完形を現在高の3~4倍としても30~40cmとなる大形のものである。

頭髪は後頭部で丸く束ねて結髪の状態を示し、結髪部には立位の円孔を3ヵ所に穿っている。頭部全面には毛髪を表現する如く、刺突による点列文が施され、この点列文は耳部の突起にも施されている。

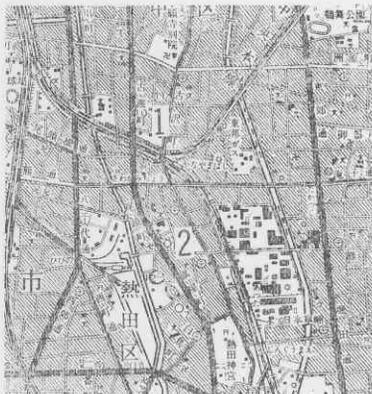


図1 古沢町遺跡(1)の位置(2は高蔵貝塚)

耳部は透孔ある偏平の半円形突起が付着するだけであり、右側は欠損のため原形を留めない。顔部は平面体で、左頬部に重円と八の字状の線刻を施し、顔面中央部にT字状の突帯を設けて眉間部と鼻部とし、鼻部下位には2孔を穿って鼻孔としている。口部は円形の押圧で形どっているだけである。さらに顔部には頭部と同様に両頬部から顎部にわたる部分および眉間部の上部に刺突による点列文が施され、赤色塗料の嵌入も認められる。

以上の如く、古沢町遺跡出土の土偶は、この地方では全く類例を見ぬ異形のものであり、顔面の赤色塗彩、左頬部の刺青と思われる線刻、さらに後頭下位の結髪部のかざり物を挿入するためのものと思われる穿孔などは、この土偶を一層呪術的なものにさせるのである。土偶の用途、使用法がまだ不明確な現在、土偶がすべて女性像でなければならないという断定は下せない。この土偶の頭部全面と両頬部から顎部にわたる部分および眉間部上位に施されている点列文は、頭部全面に施されている点列と同様に毛髪を表現したものとするのが妥当であろう。従来から刺青と推定されている他の土偶の口周囲の点列や環状線刻、口縁端に向く三角形の線刻文様とは明らかに区別しなければならないものであろう。さらに結髪の状態も性別を決定する絶対的な条件とはなり難い。

なお、この土偶の時期であるが、表面採集であり確かな決定はしがたいが、遺跡からは溝状遺構が検出されて、その遺構内および黒土層中から出土した土器片は、この地方の縄文時代晩期の壱王式に比定されるものであり⁽¹⁾、また土偶の形状に、刺突文・丹彩など奥羽地方縄文時代晩期6類(大洞A'式)土偶の特徴や、中空の頸部が、おそらくは袋状の胴部に接続するであろう中部地方縄文時代晩期末の土偶の特徴が見られるが⁽²⁾、これはこの土偶の時期を推定する要素となり得るであろう。先学諸氏のご批判を乞うものである。

- (1) 大参義一「縄文式土器から弥生式土器へ」(『名古屋大学文学部研究論集』1972)
- (2) 江坂輝彌「土偶」(校倉書房, 1950)

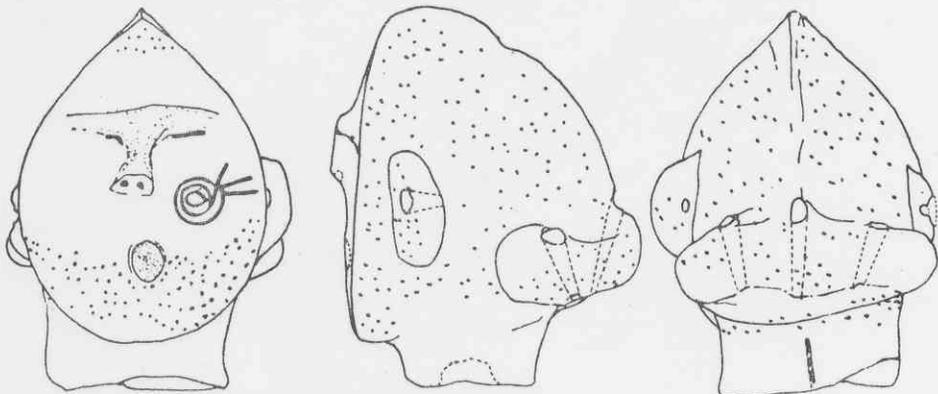


図2
土偶実測図
(1/2)